

グルジェフ『生は<私が在る>ときにのみリアルである』プロローグ 抜粋

このときに至るまで、私の内側の世界における目標は、人間の生の意味と目的をあらゆる側面から究明し、それを正確に理解したいという抑えがたい願望によって、たった一つに絞られていた。

このときに至るまで、私が人生でせわしなく追求してきた活動はすべて、失敗したものも成功したのも、私の内側の世界におけるこの唯一の目標に結び付いていた。

当時の私はいつも旅をしていて、内戦や革命など、人類の共同的な営みにおける鋭い力動的な現象が展開される場に好んで身を置こうとしたが、これもまた、私のこの唯一の目標との関係で生じた傾向だった。

なによりも、そのような現象のさなかでは、自分の最大の関心事と関係した各種の疑問の解明に役立つ材料を、いつもより凝縮されたかたちで、効率的に集めることができた。

それに伴って起きたもうひとつのこととして、私の自動的に機能する心の領域には暴力的な事件の数々で自分が目の当たりにしたありとあらゆる恐るべき光景の記憶が焼き付けられ、そしてこの記憶は、かつての七年間、最初はイタリアで、それからスイスで、そして最後にはトランスコーカサスでいろいろな種類の革命家たちと言葉を交わしたときに受けた印象とあいまって、少しずつ私のなかに、上述の第一の目標に加え、やはり自分が追求せずにはいられない第二の目標を結晶化させていった。

こうして私の内側の世界に新しく生まれた目標は、人々を容易に「集団催眠」の支配下に陥れる要因としての「外部からの影響への弱さ」を人々から取り除くための手段なり方法なりをどんな代償を払ってでも見つけなければならないという思いに根ざしたものだだった。